社長の本棚

明治35（1902）年に古物商として東京・神田で創業。100年を超す老舗企業「東港金属グループ」を率いるのは、父・勝年氏の急逝を受けて28歳で4代目社長に就任した福田隆さんだ。本好きの祖父や父の背中を見てきたため、本人も自然に柴田錬三郎や山本周五郎と触れ合ったという。

トライシクル社長 福田隆さん 45歳

「父の急逝を受けて28歳で新社長に。慌てて『稲盛和夫の実学』で勉強しました」

「お待たせしました」――。シャレたバーカウンターのあるオフィスに現れた福田さん。爽やかな笑顔は映画に出てくる俳優のようだ。成城学園高校、成城大学時代はラグビー部に所属。快足ウイングとして活躍……と想像していたら、なんとポジションは「プロップ」だという。スクラムの第1列にいるガチムチのフォワードだ。

「ハハハ、学生時代の仲間からは『詐欺だ』と言われています。当時は90キロでしたが、今は68キロですから」

中学から成城のお坊ちゃん。本人も「あまり苦労はしてこなかった」と謙遜するが、なかなかどうして人知れずの辛酸もあったようだ。

ラグビー仲間に「詐欺」と言われる

「サラリーマンを経て2002年2月に父が社長を務める東港金属に入社しました。ところが、その年の9月に父が脳出血で58歳であっけなく亡くなってしまった。そのためまったく準備も知識もなく、4代目の社長になってしまったのです」

いずれ社長を継ぐのは既定路線だったとはいえ、会社の帳簿を見て愕然としたという。

「財務諸表を見てみると、毎月1000万円の赤字を出しているような状況でした。『これはマズいな……』というのが最初の感想です。それまでにも簿記の勉強はしていたのですが、慌てて『稲盛和夫の実学―経営と会計』という本を手に取りました。稲盛さんというと、人生訓的な書籍も多く出されていますが、この本の内容は、より実践的で、値決め、キャッシュベース、採算向上などが解説されています」

学生時代は有島武郎や志賀直哉の純文学

輪廻という言葉がすっと出てくるのも、子供の頃に読んだ本の影響だ。

「祖父も父も本の虫で、自宅の書棚には儒学の本も多く並んでいました。私はその書棚の中から柴田錬三郎の『豊臣秀吉』などの伝記もの、山本周五郎の時代小説などを読んでいました。中学に入ってからは純文学に移り、『カインの末裔』の有島武郎、『暗夜行路』『和解』の志賀直哉が好きでした。祖父は本好きが高じ、『非鉄スクラップ読本』という専門書も出版しています」

その祖父の庸一氏は、ややもすると待遇面や職場環境で劣りがちな業界改革に奔走し、「東京金属事業厚生年金基金」「東京金属事業健康保険組合」をつくった人物としても知られる。

最後に、今月20日に開幕するラグビーW杯の日本代表の展望はどうか。もちろん、福田さんはチケットを入手済みだ。

「私個人としてはアルゼンチン（世界ランク11位）のラテン系ラグビーが好きですが、日本代表（同10位）は初戦のロシア（同20位）が鍵となるでしょうね」

どこまでも爽やかだ。

（取材・文＝加藤広栄）

社長就任当時、10億円程度であった会社の売り上げは、3年後に43億円、それが現在では73億円にまでアップしている。昨年5月にはIT事業を手掛ける「トライシクル社」を新たに設立。中古の産業機械からオフィス家具まで企業同士の売り買いを仲介するアプリ「リサコ（ReSACO）」のサービスを始めた。

「当初のサービス名は、大量生産で不要となった廃棄物が、命のように回るという意味で『リンネ（輪廻）』を考えていました。残念ながら商標登録済みでリサコに変更になりましたが、リインカーネーション（輪廻・転生）などの意味は同じです。我々のリサイクル業界は他業界に比べて遅れている部分も多く、いまだにFAXでの注文のやりとりも行われている。産業廃棄物にしても、再利用するか、それができなければ廃棄処分といったふうに、選択の幅が狭く、中古品の流通は1～2％しかありません。ところが、売り手と買い手をマッチングさせるアプリ『メルカリ』の人気を見てもらえば分かる通り、完全品でなくとも、部品だけ欲しいといった需要も確実にあります。まだ使えるのに捨てるのはもったいない。『リサコ』で循環型のリサイクルの仕組みをつくれたらと考えています」